

心的外傷に対する伝統医学的接近

A Traditional Medical Approach to Trauma

北田志郎

大東文化大学スポーツ・健康科学部看護学科

【緒言】

かつてヒステリーと呼ばれてきた解離・転換性障害は、発症原因として心的外傷の存在があるとされてきた。現代精神医学において転換性障害は、「身体症状症」の一部として解離性障害とは別個に取り扱われる傾向にあるが、心的外傷への反応が精神面に現れれば解離症状、身体面に現れれば転換症状となり、両者は並存しうるという考え方は今日でも臨床的意義を失っていない。むしろ両者を統合的に取り扱うことが、現代医学における心身問題の超克につながると期待される。演者はこれまで解離性遁走を含む解離性障害や、転換性障害と診断される症例に対する伝統医学的接近について若干の報告を行ってきた。特に《金匱要略》の婦人臓躁にまつわる記載を元に甘麦大棗湯を用いることで、治療経過に大きな展開がもたらされることを少なからず経験している。

【目的】

甘麦大棗湯の使用経験を通じ、心的外傷に対する伝統医学的接近の効果と意義について検討する。

【方法】

2013年4月から演者がA病院精神科で外来診療を行ない（全て引き継ぎ患者、新患なし）、2018年3月まで診療を継続した77例のうち、甘麦大棗湯エキスを用いたものについての経過と臨床的特徴をまとめた。

【結果】

77例中甘麦大棗湯エキスを処方したものは4例で、いずれも女性であった。引継ぎ時の診断は神経症圏2例、気分障害圏1例、発達障害圏1例であった。甘麦大棗湯の使用契機はまちまちであったが、3例に解離性健忘の存在が明らかになり、4例いずれも外傷体験の語りを契機に精神症状および治療関係の大幅な改善とともに、いくつかの身体症状の改善または消失が認められた。

【考察】

精神科通院患者集団としては比較的軽症と考えられる引継ぎ外来でも、心的外傷が臨床経過に少なからぬ影響を与えていると考えられる症例が、甘麦大棗湯の使用により新たに明らかになった。いずれも同剤使用後に心的外傷にまつわる語りが語られていることも、伝統医学的な接近が心的外傷の臨床に与える意義の特異性を示すと言える。

キーワード：心的外傷、心身問題、甘麦大棗湯、臓躁、伝統医学